

つかず離れずの中国史研究

吉澤 誠一郎

1968年生まれ。群馬県立沼田高等学校および東京大学文学部卒、同大学院を経て、95年に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手。現在、東京大学大学院人文社会系研究科教授、博士(文学)。専門は中国近代史。

はじめに

私が大学に入ったのは1987年で、今から振り返れば「バブル時代」の絶頂期にあたります。

1980年代の中国といえば、改革開放政策が進展していて、日本でも中国の変化について楽観的な期待が広がっていました。たしかに89年の六四天安門事件は、すでに中国研究を積み重ねていた先人たちにとっては大きな衝撃だったようですが、そのころ私はまだ国史学の学生で、むしろテレビで北京などの状況を解説する「中国専門家」の解説が見当はずれなことに不満を感じていました。

その前年にあたる1988年には、私ははじめて1人で中国旅行をしており、中国の事件に対して一定の関心はあったはずですが、それにしても深く自分にとって意味あるものとして受け止めることはできなかったようです。

それにも関わらず、大学院に入って学問をするならば、まだ基本的な論点が多く未解決のままである中国史研究をやってみたいと思って、東洋史学研究室に移籍しました。この点につい

ては、以前に書いたことがあります^①。

都市史への関心

1980年代の日本の中国近代史研究は、大きな転換期にさしかかっていた。中国において毛沢東時代が終わって改革開放政策が進展するにつれて、イデオロギーから自由になって20世紀の中国史を客観的に論じようとする機運が、日本でも高まっていたといえるでしょう。

その結果、「革命史観」による中国近現代史理解への批判が生まれた。「革命史観」とは、辛亥革命が清朝をたおし、国民革命が北京政府をたおし、共産党が国民党をたおすという革命の連続として中国近現代史をとらえる見方で、近年まで高等学校の教科書などにも大きな影響を与えてきました。この立場からは、打倒された清朝や北京政府、そして国民政府などは、無能で腐敗した政権と決めつけられていたのです。

しかし、このような「革命史観」を批判するという論者たちは、それぞれの時期にも着実に中国の経済発展や民主主義の展開がはかられていたことに、注目しようとしていました。

私自身も、たしかにそのような流れのなかで研究を始めたのですが、何となく、単純な「近代化論」に違和感をもっていました。あとから思えば、1980年代に改革開放政策の展開を賛美していたマスコミの態度への疑問に加え、中国

社会の独自性・特殊性という一面も忘れることはできないのではないかなという漠然とした感じだったかもしれません。

私が、中国近代における警察制度の導入を文学部の卒業論文のテーマに選んだのは、そのような「近代化論」への不満も大きく関係していたと思います。この警察制度は、義和団戦争で連合軍に占領され2年間ほど軍政下におかれていた天津を清朝側が回収するにあたり、その責任者だった袁世凱が導入したものです。たしかに警察制度も「近代化論」でとらえられるものですが、それは経済発展や民主化などではなく、社会的統制の強化、そして義和団をふくむ民衆運動の抑止という側面を色濃くもっていたことになります。

当時の研究者は、清末の地方自治の展開や商人団体の役割、清朝政府による憲法制定などの動きについて民主主義への道程として注目していましたが、私はむしろ官権力による公安機構の展開のほうを強調しようとしたことになりす。いずれにしても、このような新しい社会変化は、都市にこそ生じたもので、近代史を都市社会にそくして考察することの重要性についても強く意識しました(農村社会で大きな変化が生じたのは、20世紀初頭ではなくもっとあとのことというのが多くの研究者の見方です)。

その後、もっと様々な研究動向を念頭におきながら自分なりに清末天津史の研究を続けていき、博士論文をまとめました。それを加筆・修正したものが、『天津の近代——清末都市における政治文化と社会統合』(名古屋大学出版会、2002年)です。

この博士論文を書く過程では、中国の南開大学、台湾の中央研究院近代史研究所、英国のオクスフォード大学にまとまった期間滞在して研究することができ、幸運だったと思います。

天津では、しばしば自転車でお城(義和団以前に城壁で囲まれていた地区)あたりや旧租界方面に出かけ、ぼろぼろになった建物に歴史を

感じとっていました。今日では、ほぼすべてが整備されたか、取り壊されてしまい、当時の面影はなくなっています。

愛国主義と革命運動

天津史の研究を進めるなかで、20世紀に入ると社会統合の手段として愛国心に訴えかける運動が展開することにも、関心が強まってきました。たとえば、1905年に中国各地でおこった反米運動は、米国の移民政策に反対するもので、中国史上で最初の全国的な対外ボイコットと言えます。このような愛国運動は、当時、中国各地で勢力をのぼしつつあった都市型エリートが主導しており、義和団のような民衆運動と明確に一線を画しつつ展開していったものでした。

そして、おりしも2001年は辛亥革命から90周年にあたるということで、中国近現代史の専門誌から依頼されて、「清末政治運動における死とその追悼」という論文を書きました。これは、私にとって、政権の転換をめざす政治運動について論じた最初の論文となりました。

それまで、辛亥革命時期の孫文などの革命派の活動などについては、多くの研究が積み重ねられてきた古典的なテーマでした。過去の研究者は、彼らがどのような政治的志向をもっていたかということを重視していたのですが、私が気になったのは、当時の政治運動のなかで、刑死・獄死したりテロによる自爆で死んだりした人々が、同時代の人々によってどのように悼まれたのかという点でした。同志を失い自分だけ生き残った心の痛みを抱えていった者もいれば、追悼活動によって悲しみをみなで共有して運動をさらに進めていこうとする者もいました。

たぶん、この論文を書くときに微妙に影響を受けたのは、大島渚監督の最後の映画「御法度」(1999年)のようです。ビートたけし・浅野忠信・松田龍平などが活躍するこの映画は、幕末の新選組を描いたものですが、志士・浪士らとの対決という本務よりはその内部の人間模様が

主題となっています。むろん、新選組は徳川政権のために京都の治安維持をはかる武装集団であり、反清の革命家とはまったく異なります。しかし、1つの目的のために成った一隊であっても、個性あふれる人々の集まりのなかで葛藤・軋轢が生じていたことについて、この映画から強い印象を受けました。たぶん、政治運動史研究において、政治的志向の相違で説明していくのではない方法を模索していたときに、この映画から自分勝手に示唆を引き出したのだらうと思います。「御法度」から小集団の人間関係や集団規律を考えるきっかけを得ることができたとはいえ、直接にはその論文に何が影響したのか、はっきりと指摘することができません。さらにいえば、実はこの映画は「衆道」が鍵となって話が展開していくのですが、この点も私の論文とは関係ありません。とはいえ、革命家宋教仁の1906年頃の記事には「衆道」とも思われる記述があり、政治運動についても「衆道」という視点から考察してみる可能性はありそうです。

以上のようにいろいろ実験的なことを考えていたのですが、結果としては、その論文は、愛国運動における死とその政治的利用についての分析に落ちつきました。1905年頃は、清の打倒をめざす革命派と、清による改革に期待する立憲派の対抗が激しく、「革命史観」では立憲派は低く評価されていたわけですが、私としては、両派に共通する要素として愛国意識を強調することになったともいえます。

このようなおもに知識分子による愛国運動について論じたのが、第2の著作『愛国主義の創成——ナショナリズムから近代中国をみる』（岩波書店、2003年）です。この本では、1898年の戊戌政変から1912年の清朝の政権崩壊までの時期を中国ナショナリズム形成にとって決定的な時期として強調しました。その際、ナショナリズムを比較的無前提に受け入れて議論を展開する先人の姿勢とは意識的に距離をとり、ナショナリズムを批判的に対象化して吟味するという

姿勢をとることにつとめました。私としては、このような姿勢は強く反発を受けるだろうと予想していたのですが、結果的にはそのようなことはほぼなかったのは意外でした。

アジアのナショナリズムへの懐疑という点で、私が強い影響を受けた研究といえば、小谷汪之『大地の子(プーミ・プトラ)——インドの近代における抵抗と背理』(東京大学出版会、1986年)をあげないわけにはいきません。たぶん大学に入ってまもなく1年生か2年生の頃に読んだはずですが、しかし、中国史研究においては、ナショナリズムの対象化というのは、きわめて難しいことでした。その理由は、戦後日本の中国近代史研究は日本の中国侵略という過去に向き合うことを宿命としていたからです。私は1989年の六四天安門事件以後に本格的に中国史研究を始めたので、そのような先輩研究者たちとは出発点がだいぶ異なるのですが、しかし、先人たちの気持ちもわかっていました。

『愛国主義の創成』のなかでは、愛国の大義を唱え、ときにそれに殉じた人々をなるべく深く理解しようとしていました。私にとっては努力して何とかやや理解できるような対象だったのです。

日中関係史への視点

その後、様々な縁もあって、いくつかのほかの分野の研究もしましたが、ナショナリズム運動についても、少しずつ日中関係史としての関心をもって論文を書くようになりました。

実は、私は日中関係史という研究領域に入り込むことには躊躇がありました。日本人研究者として日中関係史を客観的に研究することは難しいと思っていたからです。むろん、日本人研究者は多くのすぐれた日中関係史の業績をあげていましたが、自分としては何となく気が進まない感じをもっていたことは確かです。

ところが、2003年にシンガポールで開催される予定の国際学会において、1908年の第二辰丸事件について報告するように依頼されました。

これは、日本船籍の商船第二辰丸がマカオ付近で清によって拿捕されたことに端を発する問題で、清側としては武器密輸の容疑でとらえたものの日本政府が強硬に釈放を要求したことから、世論が激昂して広東などで対日ボイコットが展開したという一件です。中国近代史上最初の大衆的排日運動です。

この依頼がきた理由は、私が1905年反米ボイコットについて論文を書いていたからでしょうが、第二辰丸事件は日中関係史に関わることから、私としてはやや悩みつつ報告を引き受けた記憶があります。

史料にそくして研究を進めると、当時、広東では治安の悪化により武器密輸への取り締まりが課題とされていたこと、また拿捕の地点がポルトガル政庁の支配するマカオの領域に含まれるか議論の余地があったことなどがわかってきました。むろん、日本政府の対応が事態を紛糾させたとはいえるものの、辰丸事件の背景には日中関係にとどまらない要因が多く作用していたと考えるようになりました。

このような点から、五四運動などの対日運動についても、より広い文脈から分析を加えることが必要だろうという見通しを得ることができました。たとえば、上海の五四運動については、かねてから労働者がストライキに参加したことが重視されてきました。しかし、彼らがなぜそのような動いたのかについては、同業団体の動員を重視する説、彼らの反日感情を指摘する説などがありました。私は、むしろ労働者たちが、みずからを「工界」に属していると位置づけたうえで、学生や商人たち（「学界」「商界」）とともに国民の一分子として運動に参加したいと願う自己肯定の言説が大きな刺激を与えていたと考えました。

このような近代における排日運動の背景にある様々な要因を考えようとしたのが、最近の『愛国とボイコット——近代中国の地域的文脈と対日関係』（名古屋大学出版会、2021年）です。

このような研究と、2005年などに中国各地で展開した反日デモとが関係あるかはずばり問われても、答えは曖昧になってしまいます。私は例えば五四運動をどのように理解するかという学者のあいだの過去の論争を念頭において自分の議論を展開したとこたえたいのですが、だからといって、自分の同時代におこった事柄をまったく意識していないとも断言できません。

不即不離

こうしてみると、私の研究の問題関心と変化の激しい中国の実態との関係は、不即不離とまとめるのがよいように思います。近代史研究は、研究者の同時代から一定の距離を保って冷静に史料分析のできる領域であるとはいえ、同時代の状況と無関係に問題設定しているわけではないというのが一般的にいえるでしょう。とはいえ、研究者ごとにその姿勢に大きな相違があるというのが実情かもしれません。

私が、都市社会やナショナリズム運動を研究したことは、やはり20世紀末から21世紀にかけての中国の状況と無関係ではなかったと思います。しかし、歴史研究の成果によって同時代中国のことが大してわかるようになるわけではなく、ましてや将来を占うことなど不可能です。また、中国とは別個に歴史学のなかで展開している議論から影響を受けてきたことも確かです。

そして、以上書いてきたことによれば、多少の偶然によって手をつけたテーマがそれなりに展開していったという側面も多分にあります。そのような偶然も良いこととして受け止め、もう少し不即不離の間合いで、研究を続けていきたいと考えています。

①「教員エッセイ「私の選択」 転変する話」東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 (<http://www.lu-tokyo.ac.jp/teacher/essay/2007/2.html>) (最終閲覧日:2021年10月13日)。

(よしざわ・せいichろう)

／東京大学大学院人文社会系研究科教授